

# 強者の戦略

## 強者の国語・〔現代文・問題編〕

今回は現代文の要約問題です。文章自体はそこまで難しいものではありませんが、必要な部分を的確に判断し、字数の中でまとめる練習としてチャレンジしてください。時間は20分程度が適当です。

### 【強者の戦略オリジナル問題】

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

歌を望まない方へ誘う力は、私だけの考えでも、すくなく 尠くとも三つはある。一つは、歌の享うけた命数に限りがあること。二つには、歌よみ——私自身も恥しながら其一人であり、こうした考えを有力に導いた反省の対象でもある——が、人間の出来て居な過ぎる点。三つには、X真の意味の批評の一向出て来ないことである。まず三番目の理由から、話の小口こぐちをほぐしてゆく。

歌壇に唯ただいま今、専ら行われて居る、あの分解的な微に入り、細に入り、作者の内的な動揺を洞察——時としては邪推さえしてまで、丁寧心切を極めて居る批評は、批評と認めないのかといきまく人がある。私は誠意から申しあげる。「そうです。そんな批評はおよしなさい。宗匠てんせんの添刪てんせんの態度から幾らも進まないそんな処ところに低徊ていかいして、寂しいではありませんか。勿論もちろん私も、さびしくて為な方がないのです。」居、たけ高たかなと思われれば恥しいが、此これだけは私に言う権利がある。実はああした最初の流行の脩よを作ったのは、私自身であったのである、と言う自覚がどうしても、今一度正しい批評を発生させねば申し訣わけのない気にならせるのである。海上うなかみ胤平たねひら翁のした論難の態度が、はじめて「アララギ」に、私の書いた物を載せて貰もらう様になった時分の、いきんだ、思いあがった心持ちの上に、極めて適当に現れて居たことを、今になって反省する。歌は感傷家程度で挫折したが、批評の方ではさすがと思わせた故中山雅吉君が、当時唯一人、私の態度の誤りを指摘して居る。なんの、

# 強者の戦略

そんな事言うのが、既に概念論だ。これほど、実証的なやり口があるものか、と其頃もつとわからずやであった私は、かまわず、そうした啓蒙批評をいい気になって続けて居た。今世間に行われて居る批評の径路を考えて見ると、申し訣ないが、私のやった行きなり次第の分解批評が、大分煩いして居るのに思い臻って、冷汗を覚える。此が歌壇の進歩の助勢になった事だったら、どんなに自慢の出来る事かと思ふと残念だ。其私自身が言うのだから、尠くとも、此方面に関してだけは、間違いは言わない筈である。

難後拾遺集・難千載集以後歌集の論評は、既に師範家意識が出て居て、対踵地に在る作者や、団体に向けての排斥運動だったのである。私にも、そうした師範家に似た気持ちだが、全然なかつたとは言えないのが恥しい。その如何にも批評らしい批評がいけないとすれば、どんな態度を採るのが正しいのであろう。

批評の本義を述べ立てるのは、ことごとしい様で、気おくれを感じるが、他の文学にそうした種類の「月毎評判記」めいたものが行われて居るから、少しは言つてもさしつかえない気がする。批評は作物の従属でないと云う事は、議論ではきまつて居る様でいて、実際はなかなか、昔ながらである。作家が批評家を見くだし無視しようとする気位は、まずありうちの正しくない態度であるが、前に言つた「月毎評判記」の類では、評家自身は、作物の一附属としての批評を綴っているに過ぎないことになる。ほんとうの批評は、作物の中から作家の個性をとおしてにじみ出した主題を見つける処にある。この主題も、近代劇によく扱われている——而も菊池寛氏が、其を極めてむき出しな方法で示している——様なのを言ふとする人々に同じたくない。主題を意識の上の事とするから、そう言つた作物となつて現れもし、読者たちにも極めて単純にして、聡明なるに似た印象を与えるのである。けれども主題と云うものは、人生及び個々の生命の事に絡んで、主として作家の気分にかかつて来た問題——と見る事すら作家の意識にはない事が多い——なのである。其をとり出して具体化する事が、批評家のほんとうの為事である。さすれば主題と云うものは、作物の上にたなびいていて、読者をしてむせつぽく、息苦しく、時としては、故知らぬ浮れ心をさえ誘う雲気の様なものに譬える事も出来る。そうした揺曳に気のつく事も、批評家ではなくては出来ぬ事が多い。更にその雲気が胸を圧えるのは、どう云う暗示を受けたからであるかを洞察する事になると、作

# 強者の戦略

家及び読者の為事でない。そうした人々の出来る事は、たかだか近代劇の主題程度のものである。批評家は此点で、やはり哲学者でなければならぬ。当来の人生に対する暗示や、生命に絡んだ兆しが、作家の気分こころに融け込んで、出て来るものが主題である。其を又、意識の上の事に移し、其主題を解説して、人間及び世界の次の「動き」を促すのが、ほんとうの文芸批評なのである。

だから狭い意味では、その将来の方角を見出して、作家の個性を充みて行ける様に導いて行くのが批評家の為事であり、もしも少し広くすると、人間生命の裏打ちになっている性格の発生を、更に自由に、速やかならしめるものでなくてはならぬ。外的に言えば人間生活の上の事情を、違った方角へ導いて、新しい世の中を現あらわすようとする目的を持ったものであることである。

小説・戯曲の類が、人生の新主題を齎もたらして来る様な向きには、詩歌は本質の上から行けない様である。だから、どうしても、多くは個々の生命の問題に絡んだ暗示を示す方角へ行く様である。狭くして深い生命の新しい兆しは、最鋭もつといまいなざしで、自分の生命を見つめている詩人の感得を述べてる処すまに寓こめつて来る。どの家の井でも深ければ深い程、竜宮の水を吊り上げる事の出来る様なものである。此水こそは、普遍化の期待に湧きたぎっている新しい人間の生命なのである。叙事の匂いのつき纏まとった長詩形から見れば、短詩形の作物は、生命に迫る事には、一層の得手とくでを持っていてる訣である。

(折口信夫『歌の円寂する時』による)

問 傍線部X「真の意味の批評」とあるが、それはどのようなものか、わかりやすく説明せよ(100字〜120字)。